

冷酷無慈悲なラスボス王子は

モブの従者を逃がさない

## オパール

『花抱き』では主人公ポジションだった子爵令嬢。慈悲深く清楚な性格という設定のはずだが、ノワールの前に現れた彼女には当てはまらない。

## ダイ

伯爵家の子息で、ネロディアスの学友兼護衛。気安く爽やかで、強い者を尊敬するという単純な性格。普段はのんびりしているが、怒ると恐い。

## ネロディアス

ストラレン王国の第二王子で、『花抱き』ではラスボスとして君臨する。ゲーム内ではとにかく冷酷無慈悲で愛を信じない男だったが、篠がノワールに転生したあとは愛を知り、ノワールを溺愛している。とにかく美しく華やかで豪快な美形だが、生真面目な一面もある。

## アベーチェ

セベスティエン公爵家の次期当主で、ノワールの実弟。『花抱き』では攻略対象の一人。天真爛漫、好奇心旺盛な性格で、ノワールのことが大好き。

## ノワール

乙女ゲーム『花びらを恋の数だけ抱きしめて』のモブ従者に転生してしまった元日本人、平田篠<sup>ひらたの</sup>。クールな性格で何があっても動じない。18歳でラスボス王子ことネロディアスに殺される運命なので、なんとか彼と距離をとろうといういろいろ試したが、従者どころか婚約者にまでなってしまった。

ふと気がつくと、目の前に金髪の女の子がいた。

フリルやリボンがついている、どこかの高校の制服のようなものを着ている。でも紺色の制服はところどころ汚れたり破れたりしていて、彼女自身も傷を負って床に倒れこんでいた。

悲しそうな目をして、彼女は僕をみつめる。

「話を聞いてちょうだい、ノワール。私はあなたの味方よ。ネロディアス王子を助けたいの」  
少し垂れ目で、頼りなげな印象の少女は、青い瞳を潤ませる。

「聖女、あなたと話をしたあと殿下は変わってしまった。従者である私にまで冷たい目を向けるようになって……あの方になにをしたのです？」

僕が話したというよりは、夢の中でその場面を見ているような感覚だ。この言葉も自分が考えて話したのではなく、口が勝手に動いた感じ。

そして、聖女という言葉とこの場面に、僕は見覚えがあった。でも、なんだっけ？

「ずっとあなたのそばにいる。どんなあなたも受け止める。そう言っただけよ」

ノワールと呼ばれた男の意識が、僕の中に入りこんできた。

そんなものは詭弁だ。孤独なあの方に、そんな言葉は届かない。けれど、自暴自棄になつてすべてを壊したいと望んだあの方を救ってくれるのなら……

そこまで考えて、僕——いや私は、自分があの高貴な御方の忠実なる僕であり従者であるノワールだと思い出した。私はあの御方に害成す聖女を、ここで食い止めているのだ。

だが、聖女の真摯な表情に、私の心は動かされる。

「……本当にネロディアス様を助けてくれるのか？」

清らかな心根だという聖女なら、本当にあの御方のすべてを受け入れてくれるのかもしれない。そう思い、私は床に膝をついて、傷ついて立ち上がれずにいた彼女を助け起こす。

「やめてっ、私はネロディアス様のものよ。あなたの愛には応えられないわ」

すると突然、聖女がわけのわからないことを叫び、後ろに飛び退いた。

いきなりのことに驚いて目をみはった直後。背中を熱杭で貫かれたような猛烈な痛みを感じた。目の前にいた聖女の顔に鮮血が飛び散る。

気づくと自分の腹から大剣が突き出ていて、あまりの激痛で、息ができない。咳きこみ、口からも血を吐いた。私はギクシャクと後ろを振り返る。

背後に、少し赤味がかったゴールドに輝く髪 of 男がいた。私を、背中から大剣で刺した、その男。

白き肌に高い鼻梁。切れ長の目で私を見下ろす、その琥珀色の瞳は烈火の怒りに燃えている。それは私が従者を務めている、ネロディアス王子だった。

「主を差し置き聖女の誘惑に屈するとは、愚かな従者であるな」

「ネロディアス様、なぜ、私を……」

味方であるはずの王子に後ろから刺され、私は絶望のままにつぶやく。

「我に気安く話しかけるでないっ」

しかし彼は大剣を大きく振って、私の体を壁に打ち捨てた。その身に、壁に叩きつけられた衝撃と、体を貫いていた剣が抜き取られる痛みが襲い掛かる。体に力が入らず、意識も朦朧として、なにがなんだかわからない。

「ネロディアス様、彼がいきなり私のこと……怖かったわ」

涙ぐんで王子に駆け寄る聖女。王子は剣を持たぬ左手でドラマティックに彼女を熱く抱き止めた。その展開が、まったく信じられなかった。王子と聖女は敵対していたはずなのに、目の前の聖女は王子と抱き合い、味方の私が無残に剣の餌食になっている。

なぜ？ なぜなのだ!?

あれほど献身的に尽くしてきたというのに。私はネロディアス様のために生きてきたというのに。あなたのためなら、それがどのような悪行でも遂行してきたというのに。

「聖女よ、あの者には魔法が効かぬ。我の妃になるのなら、あの者を剣で刺すくらいにしたたかさが欲しいものだな」

聖女には優しい声で話すのに、王子は私の名すら呼んでくれない。子供るときから王子のお世話をしてきたが、もしかしたら、たかが従者の私の名前など知らないのかもしれない。



聖女の肩を抱き寄せる王子は、冷たく私を見下ろしてニヤリと嘲笑する。

「我から聖女をかすめ取ろうとしたようだが、そうはいかぬ。これからは聖女が我の女になる。裏切り者のおまえは、もう用なしだ」

死の間に聞こえた、容赦のない言葉。

だけど。私は決して主を裏切ったりはしない。それだけは、お伝えしたかった。

もう少し生きられたのなら、誤解だと告げられたのに……

★★★★★

暖炉の薪がパチンとはぜて、私はその音にびくりと体を震わせた。絵本を見ながら寝ていたみたいだ。

私の名前はノワール・セベステイエン。四歳。

だけど、夢を見たせいか唐突に自我が芽生えた。自我というか、昔の……前世である日本人だったときの記憶を思い出したんだ。

私は平田篠という名前の男性で、三十二歳だ。いや、だった、か。

今いることは、日本ではない。そして、今いるこの世界に、日本はない。

そんな世界にいつの間にかいて、ノワールになっている。ということは、前世の自分は死んでしまったのかな？ 病気ではなかったし、働きすぎるほど愛社精神もないから過労死でもない。いき

なり死んだようなので、おそらく事故だろう。

冷静に分析しているが、それでも結構慌てている。

先ほどの夢があまりにもリアルだったので、今も腹が裂けたかのように痛い気がするのだ。

ほんの少しのノワールの意識、そして前世の篠の膨大な意識が混ぜ合わされて、頭がぼんやりしている。四歳児の脳みそには、たぶんキャパオーバーなんだな。前世で読んだ本の中に、よくそんな描写があったなと思う。

とはいえ四歳児ノワールは、突然の出来事に泣いたりわめいたりすることもなく、篠の意識にぼんやりと寄り添っているのだ。君も大概だと思う。

それはともかく、情報収集をする。よくわからないことは、情報を集めて理解することが肝心だ。視線を上げると大きな暖炉があった。煉瓦で組んであって、薪で火を起こす旧式タイプ。

日本には、こんな本格的な暖炉はあまりなかった。憧れではあるが、あれは煤や灰の処理が大変だと聞いたことがある。

しかし、子供部屋にこれほど大きな暖炉があるということは、ノワールは良いところの子なのかもしれない。そういえば、前世では自分のことは僕だったが、ノワールは私と言うようにしつけられている。貴族かな？ それはノワールにはわかっていないことみたいだな。

それよりも、先ほどの夢のほうが一大事だ。

剣が刺さった感触とか、聖女の顔とか、王子の声がやけに生々しかったから、もしかしたらノワールの人生やり直しの展開のような気がする。

というかその前に、あの場面やセリフに見覚えや聞き覚えがあった。

——夢の中で私を無残に殺したあの男は、もしかして冷酷無慈悲なラスボス王子なのでは??

前世で妹がプレイしていた乙女ゲーム『花びらを恋の数だけ抱きしめて』通称『花抱き』というものがあるのだが、その中に出てくるラスボスがネロディアス王子という名だった。そして、その従者はノワール……

夢で見たのは、ラスボス戦のひとつ手前の、主人公の聖女がラスボス王子の従者と対峙する場面。ストーリーはいろいろなバリエーションがあるが、そのうちの逆ハレムルートのセリフだった。なんで妹がプレイしていたゲームの詳細を知っているかというと、『花抱き』ではレベル上げやゲーム要素の割合が多くて、それを手伝わされていたからだ。妹は恋愛シミュレーション部分ばかりして、地味なレベル上げは兄の私に丸投げだった。したたかな妹である。

つまり、私がノワールであるなら、これはゲーム内転生なのだ。たぶん。

そして『花抱き』の中でのノワールというキャラについてなのだが……聖女がゲームの終盤で戦うネロディアス王子の従者をしていて、主人公がどのルートを通っても味方であるラスボスに無残に殺される役回りだった。

認めたくないことながら、どうやら私は『花抱き』の中のモブキャラ、ノワールに転生したようだ。

ノワールはゲームでバトルするときにはかろうじて顔が出たが、普段ラスボス王子の従者をしているときは顔に目が描かれていないモブ従者である。

なぜ、そんなモブのノワールのことを私がこれほどまでに覚えているのかというと、魔法が全然通じなくて、ラスボスステージに進むのに毎回苦勞させられたからだ。

かといって、所詮モブなので強いわけではない。このモブを排除しなければラスボス王子が出てこないのだが、その排除方法が毎回違っていて難儀だったというだけ。

ノワールはただのクソキャラで捨てキャラ、そして死にキャラだった。

つまり、そのノワールが私ならば、私の命は十八歳で散る運命。

「よりによって、なんでノワールなんだっ」

他の攻略対象だったらゲームに巻き込まれないよう工作することもできるだろうに、ラスボス王子の従者はひとり、ノワールオンリーだ。ゲーム離脱は至難の業か?

自我が芽生えて数十分。苛酷な人生の結末を知って、途方に暮れる四歳児なのであった。

「いやっ、まだ望みはある。私は四歳児なのだから、未来はどのようにも変えられるはず。結末はわかっているのだから、そうならないようにすればいいんだ」

夢の中でラスボス王子に睨まれた、あの憤怒の顔を思い出し、背筋を震わせる。

「とりあえず、ラスボス王子の従者にならないようにしよう」

情けない声でつぶやく私……けれど、もう少し生きられたのなら、と言った死ぬ間際のノワールの切実な想いが胸を締めつける。

私は死亡回避に全力を尽くすと心に決めたのだった。

「ノノ兄い、早く代わって。ぶっ刺されちゃう」

妹に言われ、僕は画面を見る。ちなみにノノ兄いは僕、篠兄しのいから変形した愛称だ。

この妹とのやり取りは、前世では日常だった。

妹は『花抱き』をプレイ中。机の上にある大きなモニターに映る画面は、聖女がノワールに向けて言い放つ言葉『まだ間に合うわ。今ならネロディアス王子を救えるのよ』を選択肢の中からチョイスしたところ。無難にハッピーエンドルート爆進中だ。

ゆえに『本当ですか？ 王子を救ってくださるのですね？』と言って近づいてきたノワールを、短剣でグサリと刺す。聖女を操作する妹には、ノワールを救う気などない。その次のラスボス戦をやる気満々だ。しかし戦闘モードが苦手な妹は、僕にコントローラーを投げて超越した。

ノワールになった僕には、この場面は心臓が痛い。だが、前世の僕はさすが聖女を後退させる操作をする。その手元の動きはよどみない。すぐにもノワールの腹から大剣が出てくるからだ。

事実、ノワールは背中から刺され、大剣が腹から突き出てくる。

後退したことにより、聖女は無傷だ。その彼女の目線が、腹を串刺しにされたノワールの背後に移る。そこにはラスボスであるネロディアス王子がいた。

ゴールドの髪が怒りを表すかのように、燃える炎みたいに描かれている。鋭い視線に高い鼻梁びりょう、

このゲームの中の誰よりも美形だが、人を人とも思わず屍しかばねを土足で踏みつけ、目に入る者はすべて傷つける、冷酷無慈悲なラスボス王子であった。

詰襟つめえりタイプの黒い衣装を身にまとい、赤いマントをひるがえすサマは、いかにもラスボス。

赤みがかった金髪がゆるくウェーブしている。とてもゴージャスなんだけど、毛量の多い髪が肩まで伸びていて、その様子がたてがみのように見えるから、僕は彼のことを『ライオンさん』と呼んでいた。妹には『ネロ様のイメージ壊れるからやめてっ』と不評だったけど。

ネロディアス王子は冷たい目でこちら、いや、聖女を睥睨へいげんした。

目の前にはぐっさり状態のノワール。彼はノワールごと聖女を串刺しにしようとしたのだ。間一髪免れた聖女はネロディアス王子を見ておののく。

『味方を刺すなんて……あなたには人を愛する心がないのねっ』

そう言って、聖女は聖なる光をネロディアス王子にかざそうとする。

いや、ノワールを刺した時点で、僕は聖女にも同じ言葉を返したい。

彼は大剣を軽々と振って、串刺しにしたノワールを払い捨ててしまう。

『愛など、この世に存在しない』

壁にぶち当たって、倒れゆくノワール。

以上。これが僕の、いや、ノワールの最後の姿パートツーである。

あ、本を読みながら、また寝ていたみたいだ。幼児の体はすぐに眠くなって困るね。

四歳のときに前世の記憶を思い出し、私はいろいろと驚愕したわけだが、あれから二年が経って今は六歳である。ノワールの私と篠の僕は良い感じに混ざり合い、互いが自分のように馴染<sup>なじ</sup>んできた今日この頃だ。

しかしながら、今しがたのうたた寝で見た前世の夢。あれはゲームをする僕とゲーム上の私の姿だったが、あのぐっさりにはなりたくないね。

ちなみに、さっきのはハッピーエンドルートだった。

四歳のときに見た夢は、逆ハーレムルートであり、話の流れやセリフは若干異なる。『花抱き』は、主人公である聖女がどの選択肢を選ぶかで結末が変わるゲームだからだ。

しかし聖女がどのルートを選択しても、ノワールは死ぬ。確実に死ぬ。

大体は、ラスボス王子が従者ごと聖女を殺そうとして、従者だけが死ぬパターン。しかしシチュエーションの違いはあれど、結局ノワールは死ぬのだ。

その、十八歳で死ぬ運命のノワールに転生してしまった私は、死亡を回避するため、この二年間は一生懸命勉強をした。文字の読み書きができないと、何事もはじまらないからね。最悪、国から脱出することも考えて、どう転がっても良いように備えている最中だ。

その甲斐あって、今は屋敷の書庫にあるどの本も読めるようになった。天井まで伸びるいつぱいの本棚には書籍がぎっしりで、前世で活字中毒だった私としては嬉しい限りである。存分に知識を吸収することができた。

今はこの国、ストラーレン王国のことや、私の家のこと、町の様子や社会の仕組みなどを中心に調べている。本の知識はなんでも死亡回避の役に立つと思っていた。のだが……調べれば調べるほど、ノワールの現状はなかなかシビアなのだった。

この世界は魔力で満ちている。

ストラーレン王国は魔力量で人の優劣をつける魔力第一主義の国だ。

北方に位置した極寒の地にあり、一年のうち雪が積もっていない期間が三ヶ月しかない。この寒い国では火属性魔法が尊ばれるが、それを駆使できるのは王族だけなんだ。

生活で使う火は、すべて王家から支給される。

町の中心に火が絶えることのないトーチがあり——本に書かれたその様子を見て、オリンピックの聖火のように思った——そこから火を分けてもらうスタイルらしい。

そこから取った火種はそう簡単には消えない、と本に書いてある。

政治的側面を言うと、その火属性の王家を魔力量の大きい貴族が支えている。中でも国で三本指に入る魔力量保持者が公爵家を名乗ることができるのだ。

現公爵家はセブステイエン家、キリング家、シャルムント家。

『花抱き』の舞台は、ストラーレン王国の魔法学園なのだが、聖女の仲間になりえる主要攻略対象



キャラの姓名が公爵家の名前と同じであった。

それを知ったときは、本当にがっかりしたな。ここが『花抱き』のゲーム内世界だということが、残念ながらほぼ確定したからね。偶然同じ名前なのだと思いたかった。でも死に際の夢も見ているからな、自分があるモブ従者であると認めて腹をくくるしかない。

都合の悪い状況から目をそらしているのかゲームのストーリーに巻きこまれるより、モブだと認めて回避するよう動くほうが建設的だ。

というか、私の生家はなんと、セベステイエン公爵家だった。

公爵家といえば、『花抱き』の中では有力な攻略対象候補になるはずの名家である。なのに、なぜノワールは悪役で、ラスボス王子の従者になるのか？

それには、ちゃんとからくりがある。

セベステイエン公爵家は水属性の名家で、代々青髪で豊富な魔力量を持つ子孫を生み出し、公爵家を三百年存続してきた実績があった。

しかし、その家の長男として生まれてきた私は、黒髪。しかも魔力なし。いつさい、ナシ。とてもシヨックだった。剣と魔法の異世界に転生したというのに、魔法が使えないなんて。

私のがっかり具合もなかだつたが、母上の落胆は相当にひどかったようだ。青髪家系で黒髪の私が生まれたことで不義を疑われたらしく、その元凶である私を母上はなかったことにしたくらいだからね。

物心ついたとき、いやその前から、私はセベステイエン公爵家の屋敷の奥のほうで隠されるよう

にして育てられた。一応、衣食住は十分にいただいていたが、外には出られなかった。黒髪の長男の存在を、両親は世間にひた隠しにしていたわけだ。

私の面倒を見てくれたのは、乳母<sup>うば</sup>のモーラだけ。両親は奥に滅多に顔を出さないの、この一連の話はモーラに聞いた。最初は詳しい話をするのを渋っていたけれど、幼い私を放置する両親にモーラは思うところがあったみたい。勉強してある程度この国の仕組みを知った私に、涙ながらにそう教えてくれたのだった。

それについて、つい最近、珍しく奥に來た父上に聞いてみたところ……

「黒髪で魔力なしのおまえが公爵家の人間であると名乗ることはまかりならぬ。成人までは面倒を見てやる。だがその間、人目に触れてはならぬ。そして大人になったら公爵家を出て、庶民としてひっそり暮らせ」なんてことを言われたのだった。

六歳児に、そういうこと言う？ まあ、前世の知識がある私には、意味はわかりますけど。

つまり、ゲームのノワールは公爵子息だけど魔力がないので親に見放され、グレちゃったんだらうね。それで道を外れた者同士が徒党を組んで、ラスボス王子とその従者になったのだろう。

まあ、ぼぼぼ憶測だけど、辻褄<sup>つじま</sup>は合う。

それにラスボスは第二王子なのだけど、王家の者の従者になるにはそれなりの家格がいるから、そういう点でもあり得る話だ。

普通は公爵子息といったら、従者ではなく王子のご学友になるものなんだけどな。

あ、魔力がないから、ご学友になれなかったんだ。『花抱き』の舞台は魔法学園だけど、魔力が

ないから学園には入れず、王子のご学友にもなれなかった、ってこと？

設定、細かい。凝りすぎじゃないか？

それはともかく、ストラーレン王国の現在の王様はマルティネス様。王様はゲームの中に出てこないの答え合わせはできないが、第一王子はウエルナンド様、第二王子がネロディアス様、このふたりは確実にゲームに出てくる。

そして私が従者になるラスボス予定の人物は、第二王子のネロディアス様。

普通の生活の中でどのようにゲームが進行していくのか、それはわからない。もしかしたらゲームと関係なく暮らしていけるのかもしれないが、ここまでゲーム色が濃厚だと、なにも起きないというほうがあり得ないような気がする。

私は妹のゲーム攻略に何度も力を貸したけど、それは聖女が幸せになる物語であって、ノワールを救出したことなど一度もない。つまり、対ノワールの攻略法などないのだ。

とりあえず、死亡回避のためにラスボス王子に会わないようにする。これは絶対だ。

「兄上え、またご本をよんでいるの？」

高い場所にある小さな窓からしか明かりが入らない、薄暗い書庫の中に弟が入ってきた。幼児特有の愛らしい声でそう聞いたのは、アベーチエ・セバスティエン、五歳。私よりひとつ年下だ。

そして『花抱き』において、攻略対象有力候補のひとりでもある。

攻略対象は、主人公である聖女が魔法学園の生徒百名の中から四人をチョイスする。

なので、アベーチエが絶対選ばれるとは限らないが、強いパーティーを組むのなら公爵子息で魔

力量の多い、つまり強キャラの素質があつてラスボス戦で有利になるアベーチエが選ばれる確率が高いのだ。水属性のアベーチエは火属性のラスボス王子と互角に戦うので、妹などは真っ先に選んでいたキャラだった。

しかし今、アベーチエはまだ五歳。聖女と色恋するなど考えもしないだろう、ほっぺがもつちりの可愛い弟である。

紺色の綿入りポンチョを身にまとい、黒タイトの上に厚地の半ズボンをはいている、北国仕様の子供服……いや、綿入りポンチョはストラーレン王国の民族衣装なのかもしれないな。よくは知らないが。

癖毛な青髪はフワワンとして、瞳はサファイアのごとく濃い青色。うむ、しっかりセバスティエン公爵家の血を受け継いだ容姿である。そのことに満足し、私は弟の質問に答えた。

「私は本を読むのが好きなんだ。本の世界は自由だからね」

「兄上は奥に閉じこめられているから、ご本をよんで自由をかんじているのですね？ おかわいそうな兄上ですうう」

そう言って抱きついてくるアベーチエ。いや、そこまで薄幸な感じではないよ、本当に本好きなのだから。

「兄上、ぼく、またお熱が出そうなのです。またアレをやってえ、やってえ」

無邪気にギュウギュウと私の服を握ってくるから、私は読んでいた本をかたわらに置き、アベーチエをやりわり抱き締めた。そうすると、アベーチエの体からにじみ出ていた余分な魔力がシュ

ワツと私の中に吸収されていく。

この世界は魔力に満ちていて、優劣はあれど、ほとんどの者が魔法を使える。そんな中、私には魔力がない。魔法をまったく使えない。なのだが、人の魔力を吸い取ったり魔法を相殺<sup>そうさい</sup>したりすることができた。いわゆる、魔法無効化というやつだ。

不思議な能力ではあるのだがこれは体質のようなもので、魔力を媒体にして作り出す魔法ではないらしい。なぜ私にそのようなことができるのかはわからない。

だが、わけのわからない力だから、父上や母上はおぞましい顔で私を見るのだろう。

魔法に重きを置くこの世界では、魔法を吸収する能力は異端なのだ。誰も理解しようとしないうし、魔法に依存する者にとっては脅威でしかないのだろうね。

だから両親は、私のことなどなかったことにしたいのだ。

まあ、それはともかく。ゲームでも、聖女の魔法はノワールに効かなくて、ゆえに攻略が難しかったわけ。

「はあ、兄上ええ、いやされますうう」

まるで、お風呂に浸かって気持ち良いいと言いかのごとく、アベーチエはそうつぶやいた。

アベーチエは時折熱を出す子だった。小さな体に膨大な魔力がおさまりきれず、魔力を制御できなくて体調を崩すらしい。これがひどくなると魔力暴走することもある。

前世風に言えば、知恵熱？ 自家中毒かな？

生まれつき魔力が多い子供を輩出する高位貴族の家の子に、よくある現象のようだ。

だが余った魔力を私が吸うことで、弟の熱はおさまった。私の能力は異端かもしれないけれど、こうして弟の役に立てるのであれば悪いばかりでもないな。

「アベーチエ、ちゃんと母上に言ってから奥に來たのかい？ 黙ってここに來たら母上に怒られてしまうよ」

「十分だけだつて。もう、どうしてお熱が下がるのに兄上に会ったらダメなのお？ 父上も母上も、もつと兄上を大事にするべきです。兄上はぼくの頭痛をなおしてくれるすごい人なのにい」

鼻息をフンフンさせて、アベーチエはそう言うけど。

「国一番の魔力を誇る公爵家に、魔力なしが生まれるのはダメなんだつて。でもアベーチエが生まれてくれたから、私はとても嬉しいよ。どうか私の代わりに、公爵家を守り立てておくれ」

「そんなの、いやです。ぼくは兄上といっしょに、公爵家をもり……もりたてます。そして早く兄上を、この暗い奥から出してあげます。そしたらぼくとずっといっしょにいられますね？」

奥というのは、この書庫や私の子供部屋がある、公爵邸の北側の一番奥のこと。いわゆる、生まれたときから私が住んでいる居住スペースの通称だ。

奥には書庫の他に、倉庫とかパントリーとか、買ったものを置いておくような部屋がある。この区域にはモーラと一部の使用人しかやってこない、おおよそ入室禁止エリアだ。

両親も、ほぼやってこない。熱っぽいときにアベーチエがやってくるだけだ。

異端であり、容姿も公爵家の者とかけ離れている私は、誰にも会ってはならない。だからつい最近までアベーチエにも会ったことがなかった。

しかし半年前、ヤンチャな弟は探検と称してこの区域に入りこんできたのだ。今日のように書庫で私を発見したアバーチェは、青い目を真ん丸にした。

「あなたはだあれ？」

屋敷に自分と同じくらいの子供がいて驚いたのだろう。

でも私は、モーラから弟がいることを事前に聞いていたし、ゲームの知識で、セブステイエン公爵家の子息はアバーチェであると知っていた。妹のお氣にだったのだ。

ゆえに、兄だと答えた。

「兄？ 兄上ええ？ ぼくに兄上がいたなんてええ」

驚愕して手でほっぺをおさえるアバーチェだったが、捜しに来た使用人にみつかつて、すぐに本棟に連れ戻されたのだった。

そんな経緯があったのだが、アバーチェの頭を撫でたときに魔力を吸収された感覚がわかったみたいで、すっごく気持ちが良かったからまたやっつてと言って、たびたび私のところに来るようになった。

母上は異端の力でアバーチェの魔力を吸われるのがイヤみたいだけど、確かに熱は下がるし、アバーチェが私と会いたがるので、渋々認めているようだ。

「もう十分は過ぎたのではない？ 母上がヤキモキしてアバーチェの帰りを待っているよ。アバーチェは公爵家の跡取り息子、母上にとって大事な大事な子供なのだからね」

それに、母上の怒りがこちらに飛び火したらイヤなのである。

母上は私の存在自体が許せないみたいだ。奥にはほぼやってこない母上だけど、たまに怒りが湧き起ると奥に顔を出す。そのときは私に辛辣な言葉を浴びせてきた。

八つ当たりは困るんだよな。まあ、篠的大人対応で大抵はスルーしている。けれどそうは言っても、母上に刃のような言葉で切りつけられたら、私の心の中にある子供のノワールの部分がしくしくと痛むのだ。

私の言葉を聞くなり、アバーチェは眉尻を下げた。

「兄上も、ぼくが大事？ また来てもいい？」

「もちろん、アバーチェは私の大切な弟だよ。いつでも遊びにおいで」

微笑みかけて言うと、彼は笑顔を弾けさせる。

——無邪気で可愛い弟。父上も母上も、公爵家後継も、地位も財産も、愛も。私が持つべきものすべてを奪う、憎き弟。

ゲームの中のノワールは、そんなふうにして弟を恨んだかもしれない。

でも私は、前世でもお兄ちゃんだったのだ。妹も弟もいて家族円満、なんの懸念もなかった。だから、ゲームでは兄弟で戦う場面があったが、弟に敵意を向ける気持ち、私にはわからないな。

弟妹というものは、無条件に可愛がるべき存在だと思っている。小さくて、どこもかしこも丸くて、たとえ成長して私の身長を追い越したとしても、可愛い以外の言葉はない。前世で弟に身長を越されたときちよつとだけ自分を不甲斐なく思ったけれど、弟が大きくなること自体は嬉しかったよ。



前世の弟も妹も、アバーチェも、無邪気に私を慕ってくれた。その様子を見れば、こちらも守ってあげたくなるものだ。

アバーチェは公爵子息で魔力量が多く、すぐに魔法を自在に操るようになるだろう。私などが守らなくても誰より強い水魔法使いになる。

けれど、小さいうちは私が守るよ。なにものからも、苦しい熱からも、転んで怪我したときも、抱きしめて優しくつつんであげる。だって、私はお兄ちゃんだからね。

まあ……ゲームの中のアバーチェは兄の私に容赦なく魔法をぶつ放してきたから、思うところはあるが、今は私にしがみついてくる甘えん坊な弟だ。

いつか、弟に魔法をぶつ放されるときがくるのかと思うと、悲しいけどね。

というか、私とアバーチェが兄弟だと知ったのは、こちらに転生したあとのことなのだ。

ゲームでノワールはモブだった。出自不詳ってやつ。もしかしたら、ゲーム内では私とアバーチェが兄弟という設定自体がなかったのかもしれない。つまり、ゲームでのアバーチェ対ノワールの場面は兄弟対決ではなかったのかな？

だから正直、ノワールの出自は意外だったんだ。まさか、顔を出した直後に死ぬモブが、公爵子息だったとはね。

そんな考えに耽<sup>ひた</sup>っている間に、アバーチェは笑顔で屋敷の本棟に戻っていった。私は彼を見送ったあと、読みかけの本を手に取り、再び読書を開始する。

六歳にして私が書庫の本を読みあさっている理由は、もちろんラスボスの従者を回避するために

どんな知識をも身につけたいからだけど。もうひとつ、成人したら家を出ると父上に言われているからというものもある。

私は十八歳で死ぬ運命だけど、もしも死亡回避できたとしても、町に出てひとりで暮らさなければならぬ。その準備でもある。

絶対に死ぬとは限らないからな。将来の備えとして知識のインプットは重要だ。

私……というか、篠は元々読書好きで、活字中毒気味だった。本を読むのは苦ではない。どころかずっと本を読んでいられる。

書庫にこもってひたすら本を読んでいい今の状況は、私には天国だった。

公爵家の書庫にはいろんな書物がいっぱいあるが、魔術書の割合が多い。自分には魔力がないから実用的ではないけれど、どんな原理でどうなるとか、普通に読み物として面白いから敬遠しないで読んでいる。

たとえば面白くなくても、読みはじめたら最後まで読まない気が済まないタイプ。これぞ活字中毒者。前世でも、どんなジャンルの本も読んだ。特にミステリーが好きだったのだけど、異世界に転生して役に立つのはミステリーよりもライトノベルだったな。もっと読んでおけば良かった。

妹のせいでゲームを極めた時期もあったが、ゲームというほどのめりこんだわけではなく、比率としては読書八、ゲーム二くらいのもの。

あ、仕事の時間は別だ。篠は趣味が読書の、平凡な会社員って感じ。

弟はスポーツマンで、本やゲームより体を動かすほうが得意だったため、妹はゲームのレベル上

げ要員として私に白羽の矢を立てたわけなのだ。

しかしなんの因果か、今はそのゲームの世界の住人になってしまった。それが一番ミステリー。ところで私は、屋敷の隅っこで隠れるようにして生きているのだが、このまま蟄居ちつきよしていられるなら、ラスボス王子の従者にならずに済むのではないかと考えている。ネロディアス王子に会わなければ従者のなりようもなく、ゲームに巻きこまれることはないからな。

それに、書庫で暮らすのは大歓迎だ。いや、ちゃんとノワールの子供部屋はあるし、三食出る良い暮らしだよ。むしろ三食屋寝付きで読書三昧だ。つまり文句なしなので、ラスボスにみつからないう、このまま屋敷の奥に隠れていたいということ。

引きこもりと言わなければ、私は両親の命令で奥に居るのだからね、たまたま利害が一致しているだけである。

というわけで、死亡回避するべく、まずはできる限り屋敷の奥でひっそり暮らすことを目標にした。とても地味な作戦だが、みつからないことが肝要だ。

篠として客観的に見たとき、この生活の中で子供のノワールに足りないものは、親の愛情くらいなものだ。今の両親は私をいないものとして扱い、養っているけど放置しているからな。

しかし私には篠の記憶があり、前世では親に愛情をかけてもらった。私の両親は前世の両親だけいい。

まあ、アラサーの篠には、三百年もの長きにわたって脈々と受け継いできた公爵家を途絶えさせられない、という公爵家の体面とやらが少しはわかるんだ。でもそれでネグレクトは駄目だし、全

然擁護はできない。

だけどそういう大人の事情はさて置いて、折檻や飯抜きさえなければ、大人の記憶を持つ私は悠々自適気分で暮らしていけるということだ。

ただ手も足もまだまだ小さく働くのは難しいので、もう少し育てていただければありがたいです。穏便に、ゲームが終了する十八歳まで屋敷の奥で生活させてもらえたら、とっとと町に降りてひとりで生活しますので、お構いなく。という心情であった。

「あ、ひとりで暮らすなら料理もできたほうがいいな」

そう思い、私は読み終わった魔術書を棚に戻し、料理本を手取るのだった。

★★★★★

粉雪がバラバラと降りかかる寒い日。

私は女装して馬車に乗りこみ、王宮へ向かっていた。

外で雪が降りしきっていても、温かい部屋でぬくぬくと暮らしていた深窓のご令息だったというのに、いきなり外の冷気を浴びる事態になり、頬が引きつっている。

「どうしてこうなった？」

ラスボス王子に会わないよう、屋敷の奥でひっそり暮らすことが私の目標であった。なのに、そんな私がなぜラスボス王子のテリトリーである王宮に向かっているのかというと……話は一時間前

にさかのぼる。

一時間前、私は子供部屋にて読書をしていた。暖炉に火があり、ぬくぬくである。

そこに、久しぶりに父上が姿を現し、開口一番言ったのだ。

「ノワール、急いでこのドレスを着るのだっ」

あまりにも脈絡がなく面食らったが、父上にはちゃんと理由があった。

父上が言うには、今日は第二王子のご学友候補を選ぶためのお茶会が王宮で開かれていて、そこに王子と同年のアバーチェが招かれたらしい。ネロディアス様はあまり体調がよろしくなかったようで、顔を青くしていた。そんな王子に、アバーチェが自慢げに言ったそう。

「ぼくが具合が悪いときは、兄上が治してくれるのです」

父上はすぐにアバーチェの口を手でふさぎ、兄上のことを口にしてはいけなさと注意した。しかし第二王子はしつかり聞いていて、目を光らせた。

「私も、その者にこの具合の悪さを治してもらいたい。公爵、頼む」

第二王子のみならず陛下にもお願いされた父上は、私の出自を隠すのを条件にして依頼を引き受けた……ということらしい。

「王宮では誰の目があるかわからないから、念のため女装をしておくのだ。おまえは公爵家の遠縁の娘という態だ」

公爵家に黒髪で魔力のない息子がいると知られてはならない。それで父上は私に紺色のドレスを

持ってきたというわけ。

口答えを許さない雰囲気な満ち満ちた父上の高圧的な態度が、私は苦手だ。なので、おとなしくドレスに袖を通したよ。しかし中身アラサーリーマンの篠はドン引きである。

モーラが姿見を見せてくれたのだが、彼女が上手に着つけてくれたからか、鏡の中にはまあまあ可愛らしい少女がいた。

普段の私は黒髪ロングで、なにやらホラーチックな日本人形の様相だ。横長の目つきに、生気のない黒い瞳。モブゆえか、小さな口に主張のない鼻で、自分の顔ながら、簡素で陰気で不気味だと思っていた。

だがモーラのブラッシングにより、いつもより髪が艶やかになって……まがまがしさが薄れた日本人形くらいにはなったかな。

横髪は胸の前に垂らし、腰まで伸びていた後ろ髪はウエスト辺りで綺麗に切りそろえられた。耳の上辺りから頭頂部にかけて結わえて、髪飾りでとめている。前髪は目の上辺りで自然に横わけにしてある。前髪はつつんだと日本人形まつしぐらだから、それでいいです。

慌てて調達したらしいドレスは、胸の前にフリルがあって、袖はふわりとしたフレアー型、濃紺の落ち着いた色合いだ。スカート丈は膝下十センチ、この国では雪が積もっている日のほうが多いので、女性は裾を引きずるようなスカートはかかない。スカートの下にパニエというボリュームを出すものをつけると、腰回りが温かく、スカートもふわりと広がる。

そして足には厚地のタイツをはいて、編み上げのロングブーツを着用するのが定番だ。

ドレスの上には白い毛皮のケープを羽織り、前をリボンで留める。

しかし六歳だから体が成長しきっていないくて、男の子なのに、ドレスを着ても違和感がないのが悲しい。自分の顔にあまり興味がなかったから、そのときはじめて自分の顔を鏡でじっくり見たが、造作がちよっと女子っぽいかな？

目は吊り気味で細めだから愛くるしい系の女子ではないけど、白い肌にぼつりと浮かぶ右目の下の泣き黒子<sup>ぼくろ</sup>が目を引く。あ、まつ毛も長いな。それで女子っぽく見えるのかもしれない。

そんな経緯があつて、私は女装をして、ラスボス王子のところへ向かつている最中なのだった。ああ、できれば一生関わりたくなかったのに、まさかアバーチェが余計なことを言うとはね。しかし家長の命令は絶対。働ける年齢になるまでは養ってもらうため、ラスボス王子のもとに向かわなければならぬ。

それにアバーチェを見ていると、魔力過多は相当気持ち悪そうだから、私を殺すだろうラスボス王子とはいえ放っておくのは可哀想だね。

特に王子に遺恨があるわけではないのだ。あれはゲーム上の話で、現状私が王子になにかをされたわけではないから。しかし殺される未来は遠慮したいので、チュツと吸ってサツと帰ろうと思っている。

馬車の車窓から通りがかりに見える一面真っ白な雪景色の美しさに目を奪われた。横に長くて大きい王宮の外観にも圧倒される。

私がこの異世界に転生して、屋敷の奥から出るのははじめてのことだった。本から知識は得てい

たが写真などではなく、ストラーレン王国の町や人々や王宮の様子などは想像の域を出ない。なので目に映る風景はどれも新鮮だ。

けれど、行く先は私を殺すラスボス王子のもとだから、心が浮き立つことはない。

馬車が止まり、一足先に降りた私が降車する父上を待っていると、ドーンという大きな物音が鳴り、少し離れたところで火柱<sup>ひばし</sup>が空に向かって上がった。

「お茶会が催されている場所の方角だ。アバーチェが従者とともにそこに残っているのだ。早く行くぞ」

父上にうながされ、私はお茶会会場を目指す。しかし、父上は雪道を歩くことに慣れているのだろうが、外出を許されなかった私は雪に足を取られてしまう。石畳はある程度除雪されているのだが、ブーツが滑りそうで怖い。

そうしてギクシャク歩いていると、半泣きのアバーチェが駆け寄ってきた。

「父上え、大変です。お茶会が終わるところだったのに、王子がどっかーんしちゃったのお」  
そう父上に報告するアバーチェだったが、私をみつめて目が真ん丸になった。

「あ、あ……」

兄上と言いたいのだろうが、それは内緒なので、口の前に人差し指を当てた。女装中に兄上呼びはご遠慮いただきたい。

アバーチェは手で口をおさえる。可愛い仕草で、私は思わずほっこりした。

とはいえ、緊急事態だ。私たちは急いで外から回り、お茶会会場のある部屋の庭へ向かった。



庭の真ん中に火柱<sup>ひばしら</sup>が立っていて、その中心に人がいた。

普通なら、人が火だるまになっているのかと慌てるのだろうが、私はこういう場面を何度もゲーム上で見ている。

小さいけれど、間違った。金の髪と白地の盛装が炎越しにオレンジ色に光っている。炎の起こす熱風に、豊かな髪が揺らめいていた。口をへの字に引き結び、子供でも威厳を保ち胸を張り、炎の中するどい目つきをしている。

炎の中に立っているのは、ラスボス王子こと、ストラレン王国の第二王子ネロディアスだった。王宮の庭に火柱<sup>ひばしら</sup>が上がり、大人たちが右往左往する中、私は迷わず彼に近寄って行った。

彼を取り巻く魔力は、湧出する噴水のように間断なく噴きあがっている。とてもではないが、小さな体では抱えきれない莫大な魔力量だと、ひと目でわかった。

「危ないからこつちへ来るな。怪我をするぞ」

自分のほうこそつらく、どうにもならないのだろうに、王子は私の身を心配して声をかけてきた。ゲームでは冷酷無慈悲なラスボス王子だったのに、優しいじゃないか。

とはいえ彼が来るなど手を振ると、手のひらに乗っていた炎が私を目掛けて飛んでくる。そこは配慮してもらいたいところだ。令嬢（仮）の顔に傷がつくだろうが。

でも私は魔法を相殺<sup>さうさい</sup>できるので、大丈夫。炎のかたまりは私の体に到達する前に、砂がこぼれるかのようにさらさらと崩れた。

苦しいのか、王子が炎の中で呻<sup>うめ</sup>き、頭を抱えてもがいている。目を見開いて、はあはあと苦しそ

うな息をつく。どうやら魔力暴走になりかけているようだ。

アバーチェは、ちょっと体の外に魔力があふれるだけでも、頭痛がすると言って私のところへやってくる。魔力過多はそれほどつらいものらしい。

アバーチェ以上に魔力があふれている今の状態でなにしなければ、さぞかし苦しいことだろう。ゲームでは、ネロディアス王子は幼い頃に魔力暴走を起こし、数人死者を出した。それから、ストラレン王国一の魔力量の多さで本来なら敬われるべきところ、人殺しだと恐れられ忌避<sup>きひ</sup>されてしまう。結果、自分を顧<sup>かへり</sup>みない者たちをすべて焼き払いたいと憎悪を燃やす、悪の王子になるのだ。逆ハールムルートで、王子が聖女にそのようなことを語っていた。

今日の前で起きているコレが、数人の死者を出すという魔力暴走事件かもしれない。

だが私は、これを止められるぞ。

苦しむ王子が雄叫びを上げると、火柱<sup>ひばしら</sup>が膨れ上がって大きくなった。彼がいる庭は熱風が吹き荒れ、私の長い黒髪やスカートを揺らす。庭には雪が積もっていたはずだが、とけてしまったのか白い景色はまったくなく茶色い地面がむき出しになっている。かろうじて常緑樹が庭の周りを緑で彩<sup>いろど</sup>っていた。ま、ブーツが滑らず、歩きやすいのは良いことだ。

というか、お茶会は室内で行われていたはずだが、こうして王子がひとりで庭にいるということはおそらく被害を出さないよう配慮して庭に逃れてきたのだろう。賢明な判断だな。

だったら王子の気遣いを無にしないよう、この場をおさめないとね。無論、死者も出さない。

「来るなど、言っているのだっ」

王子はそう言うけど、構わずに歩を進める。でも炎のかたまりが飛んでくるのは、大丈夫だとわかっていても怖いので、手で払いのけさせてもらう。

私が手を振ると、魔法が弾かれるビィインという音が辺りに響いた。弾かれた彼の魔法は分解し、私の手の先で霧散する。

分解した魔法の粉が私の周囲に渦巻く。王子の魔法の質が良いからか、それらは虹色の残滓<sup>ざんし</sup>となって私の周りを輝かせた。

自分のあずかり知らぬところではあるが、まあ、綺麗は綺麗だ。

王子のすぐそばにやってきた私は、ためらうことなく火柱<sup>ひばし</sup>の中へ手を突っこんだ。魔法を無効化しているから熱くはない。そして王子の手を握ると、私は警戒されないよう、王子に微笑みながら言った。

「御機嫌よう、王子。御無礼いたします、ゆっくりお休みください」

そう言っているうちから、王子の魔力を吸い上げた。

魔法ではないので、私は普通にしているでも魔力が周りにあれば吸ってしまう。意識して吸うというのは、ジューズをストローで飲むように、あえて吸引する感じだ。

すると、ドウウウルルンツ、というなにやら軽快な音が聞こえた……ような気がした。あれだよ、ゲームで武器を買うと、たまったお金が減っていく、あのときの効果音のやつ。もしかして、王子のマジックポイント消費音なのかな？

火柱<sup>ひばし</sup>は魔力を吸いこむごとに徐々に小さくなっていき、王子の魔力をある程度吸い取ったところ

で、私は王子の手を離す。でも王子は気を失って倒れそうになったので、私はぐったりした王子を慌てて抱きとめた。地面に倒れたら、白いお衣装が泥だらけになってしまう。

王族のキラキラ衣装など、私は弁償できないからなっ。

その頃には辺りはすっかり元の静寂が戻っていて、父上が駆け寄ってきた。

「どうなった？ 王子は無事なのか？」

気絶する王子を私から引き取って、父上は聞いてくる。王子の心配しかしないのが、父上という感じです。思わず、苦笑。というか、冷笑。

そんな冷めた気持ちで、私は父上の腕の中にいる王子を見やる。

彼は子供だけど、しっかりラスボス王子であった。

あれだけの炎を体にまとわせても、怪我ひとつない。それは多大な魔法を行使しても、己になんのダメージも及ぼさないほどの魔力がある証だった。

魔法を発動する者は、無意識に体を魔力でコーティングするらしい。だから、手の上に炎を出しても、氷の槍を素手で握<sup>か</sup>っても、痛くも痒<sup>かゆ</sup>くもないのだ。そう、魔法書に書いてあった。

しかし制御不能の魔法は、別。己の身を焼くこともある。

だけど王子は無傷で、麗<sup>うるわ</sup>しのかんばせも健在だった。さすがだな。

目を閉じていてもその目は凛々<sup>りんりゃ</sup>しく、まつ毛は長い。スツと通った鼻筋、桜色の唇。ゲームで一番美貌の男、聖女を差し置いて美しい男だけある。

「魔力を吸い取っただけです。膨大な魔力を短時間で吸引したので、体がついていけずに眠ってい

るのでしょう。でも、魔力が回復すれば目を覚ましますよ。アバーチェもそうなので、大丈夫だと思います」

「そうなのか？」

父上はアバーチェに尋ね、彼はうなづく。

「兄上に癒されると、気持ちが良くなってお昼寝します。目覚めはすっきりさっぱりです」

こちら辺は誰にも聞かれないように、こっそり親子で話していた。

「それよりも兄上、とつてもきれいでしたあ、炎のオレンジが兄上の白いはだにはんしゃして、キラキラでえ、兄上は目がギンツでえ、黒い髪がバサバサアでえ」

アバーチェの言うキラキラは、あの虹色に光ったやつだと思う。

「そうだね、私が魔法を構築する回路に触れると砂粒以下の大きさに分解してしまうわけだが、そのときあんなに綺麗な反応が出るなんてね。私もはじめて見たよ」

魔法というものは分子レベルの魔法陣のようなものが寄り集まってできるというイメージだ。その魔法陣のようなものを、本では回路と表している。

私の魔法無効化は、その回路をバラバラにしてしまう感じ。

前世的に言えば、遺伝子の塩基配列を壊す感じ。わかりにくいかな？ まあ、意識してやってい

るのではないので、憶測だけどね。

すると、父上はまた驚愕した。

「なに？ 魔法を相殺したのははじめてだったのか？ 王子が危ないではないか」

……父上は安定に、私を心配することはないのだった。いいです、いつものことなので。

「いえ、魔法の相殺自体は何度か経験があります。あんなふうに光ったのははじめてだということ……母上の魔法の暴発で水をかぶりそうになったことがあります、相殺してもそのときはこんなふうにはならなかったのですよ」

「兄上、それは母上の嫌がらせでは……」

ぼそりと言うアバーチェの口を手で塞ぐ父上だった。

あ、やつぱりそうだった？ 母上は滅多に奥には来ないが、姿を見せるときは私に嫌味を言うてくることが多い。あの母上の魔法の暴発が、わざとだとか嫌がらせだとかとは思わなかったけれど、なにかしら私に難癖をつけたかったのかもなあとは思っていたよ。

それよりも、とにかくにも王子の魔力暴走はおさえたわけなので、早々に引き上げたかった。

『騒動をおさめた、あの謎の少女は誰だ？』と騒然とするお茶会場で、気を失った王子を従者に預けた父上は、私とアバーチェをソツと馬車に乗せ、王宮をあとにした。

よつぽど黒髪の私が公爵家の者だと知られたくないのだね。

まあ、それはいい。王子が目覚める前に退却できれば、私はそれでいいのだ。

★★★★★

思いがけず王宮へ行った日以降、私は、昼間は暖炉の前で縫物やパン作りをし、午後は本を読む

という、いつもの日常を過ごしていた。

縫物はモーラが貴族のたしなみだと言うから習ったが、それは令嬢限定なのではないかな？

しかし私は成人したら屋敷を出る身。腕が良ければ仕立屋で仕事をもらえるかもしれないから、とりあえず身につけられるものなんでもやってみるスタンスだ。

そんな静謐で穏やかな時が流れ、王宮での出来事を夢のように感じはじめていた、ある日のこと……

新しい青紫色のドレスを持った父上が、またまた子供部屋に現れた。このシチュエーションは二度目。こうして私の静謐は打ち破られたのである。

「ノワール、婚約が決まったぞ。このドレスを着て王宮へ行くのだ」

開口一番そう言う父上をいぶかしんだことは許してほしい。さっぱり意味がわからなかったのだ。なぜなら私は、この屋敷から外へ出てはならない身なのだから。

さらに、私の婚約が決まったとして、なぜ男の私がドレスを着る？

黒髪を三角巾で覆い白いエプロンを身につけている私は、パン作りの最中だった。ひとまとまりになったパン生地を銀色のボウルにビタンビタンぶつけながら父上を見やる。

私は奥からは出られないが、モーラが部屋に材料を持ってきてくれるからパン作りができる。生地を練って成形までしたら、モーラが厨房へ持っていき、焼いてもらうのだ。

これも独り立ちに向けての準備のひとつだ。

本を読んで独学でパン作りをマスターした私は、成人したらパン屋になりたいと本気で思いはじ

めている。前世の私は会社員だったが、将来なになりにしたいかと子供のときに聞かれたら、パン屋さんと答えていた。前世では競争が激しくて、とても店を持つような甲斐性も腕もなかったが、この世界でなら小さなお店を持つことくらいできそうじゃないか？ 甘いかな。

ああ、甘いといえば、ケーキ屋も捨てがたい。なにせ前世は色とりどりの美味しいケーキがあったからね。それを再現できたら売れると思うのだ。やっぱり甘いかな。

だがパン屋は一旦置いておいて、私は大事なことを父上に尋ねずにはいられなかった。

「父上、私は公爵子息であることを隠して十八歳まで屋敷の奥深く、ひっそり暮らさなければならぬはずなのですが。なにゆえ婚約なのですか？」

「……第二王子のネロディアス様が、おまえと婚約したいと言っているのだ。王家の命令には逆らえまい。それに王家との婚約は公爵家のためになる、とてもありがたい御申し出だ。断るなど、愚の骨頂っ」

私の嫌味をさらりと流し、動じることなく、父上はドレスをビラビラ振り回しながら言い切った。公爵家第一主義の父上は、そのような答えを出したようだ。

私はパン生地の入ったボウルに濡れ布巾をかけ、暖炉のそばに置く。一次発酵である。そして三角巾とエプロンを外してモーラに渡し、父上に向き合った。

ここは正念場だ。

身に余る光栄である王族との婚約……だが、断る！

冷静に心を落ち着かせながら、私は父上との舌戦に挑んだ。



「なぜネロディアス様が私などに？」

「先日の件で、おまえを見初めたそうだ」

父上もドレスをモーラに渡し、私とともに食卓の椅子に腰かける。子供部屋に客人など来ないので、座って話ができるのは食事用のテーブルしかない。

というか、やっぱりラスボス王子に目をつけられてしまったか。死亡ルートしか見えない。

「それは、私のことを女性だと勘違いしているのでは？ あの時私はドレスを着ていましたから、女の子だと思って婚約を申しこんだのではないのでしょうか」

「それは確認してないが、陛下は公爵家の第一子が男性のノワールだと知っている。届け出に嘘はつけぬからな」

「陛下はご存じでも、ネロディアス様が私を女性と思いこんでいたらどうするのですか？ それを黙って婚約を進めたら、王家を騙したことになりますよっ」

ちよつと強めに言ってみた。なんとしても婚約話など断らなければならない。ラスボス王子に開わりたくなくて、こちららも必死である。

背筋を伸ばすが、六歳児ゆえチョンと椅子に座る私に、大の大人である父上は説得モードで身を乗り出した。私がおねえと思っていなかったようだな。

「ノワール、王家と婚約ということは公爵家にとって良い話なのだ。なんの取柄もないおまえが公爵家に貢献できる最後の機会だぞ。喜んでお受けするべきことだ」

なぜに、ほぼほぼ放置されている私が喜んで公爵家に貢献すると思うのだろうか。公爵家に生ま

れたら公爵家のために尽力するものだ、父上は普通に思っているようだ。

ゲームのノワールだったら、不遇を強いる公爵家に恥をかかそうとして、婚約話を盛大にぶつ壊すと思う。

……ふむ、それも一案だな。しかし私はそれほど好戦的ではないし、公爵家を敵に回したら読書三昧の日々に終止符が打たれるかもしれない。それは私の思うところではないのだ。

でも婚約はしたくない。ラスボス王子に近寄って、若死にしたくもない。

「第二王子はお世継ぎを望まれないのですか？ あれほどの魔力量を誇る王子が子孫を残さないのは、国の損失になるではありませんか？」

畳みかけるように、父上に訴える。婚約したくないという感情論だったなら、家長の一喝で本決まりさせられるが、正論を述べる六歳の私に父上もたじたじだ。

そうだ。今、六歳の仮面をかぶることに意味はない。アラサー篠の処世術で、なんとしても、父上を丸めこまなければならないのだっ！

「そこは王家の問題でわかりかねるが……この国では同性婚が認められている。貴族が男性の側室を囲うことは珍しいことではない。それにお世継ぎは側室を迎えればよいのだ」

確かにこの国では同性婚も一夫多妻多夫も認められている。収入に応じて妻子の人数に制限はあり、養えないのに妻や夫を増やしてはならない、というのがあるが。

この国は雪に閉ざされ、外出もままならないことが多い。ゆえに、家の中での生活が重要視され、家族の人数が多いと幸せも多いと認識されている。

この国の国史大系にはそのようなことが書かれてあった。

ゲームの中に、逆ハーレムルートというものがある。逆ハーレム、いわゆる女性主人公が男性の攻略キャラ全員と仲良くなるものなのだけど、それは全員と結婚する展開なのだと思う。

ゲームでは、その結末までは描かれていなかったけど、たぶんそう。

そしてこの国ではそれが可能だ。エロっ。

いや、エロゲーではなかったよ。妹がやっていた全年齢向けの乙女ゲームだから。

なんて、いたいけな六歳男児の中で思うアラサーおっさんであった。痛いね。

「貴族の婚約というものは、家同士の契約だ。王子と婚約することで、おまえは王家と公爵家の橋渡し役の任を帯びるのだ。また、王子が国王となった暁には国母となり、公爵家を優遇する。そのように動け」

つまり、黙って公爵家の役に立てということだな？ 乱暴な話である。

しかし父上のこの様子では、同性の婚約者はイヤ、は通じなさそう。

「私の立場はどうなるのですか？ 王子の婚約者である黒髪の私が公爵子息だと、知られたくないのでしょうか？」

今度は私を衆目にさらしたくないだろう、という方向で攻めてみた。

「そこは悩ましいところだ。しかし公爵家を継ぐ男子だからダメなのだ。嫁ぐ身である女子としてなら、魔力が少なく髪色が少しばかり違っていても注視されないだろう」

ジト目になるのが自分でわかった。まだ子供だからいいが、女装がいつまでも通用すると思わな

いでもらいたい。ガタイのいい男が女装していたら、それこそ公爵家の恥になりますよ。

なんならゲームのstuhlでは、ノワールはラスボス王子より背が高かった。ラスボス王子の後ろに、鼻と口しか描かれていない簡素な顔の、背の高いやつが常に控えていたぞ。顔の全容が描かれたのは、終盤のバトルシーンだけだったけど。

とはいえ説得は難航を極めている。婚約が決まったと言って部屋に入ってきたのだ。もう約定を交わしちゃったのかもしれない。

これは、王子のほうから手を引くように仕向けなければならないかな。

父上は公爵家の益になることに貪欲だ。この家を自分の代で潰さないよう必死なのだ。

「婚約話を進めるのは、王子が私のことを女性だと勘違いしていないか、そこを確認してからにしてもらえませんか」

少しでも先延ばししたい、あわよくば性別誤認で今回の話はなかったことに……という展開に持っていきたかった。

とその時、部屋の扉がノックされ、執事が顔を出した。

「旦那様、ネロディアス殿下がお見えです。婚約者であるノワール様にお会いしたいと……」

ラスボス王子、きたー！

私はなるべく王子から離れたいのに、なんで王子から来ちゃうんだよね……

ああ、ゲームの強制力という名の大きいなる気配をひしひしと感じる。死亡ルート確定案件だ。

ライトノベルでよくそういう展開があった。

いやいや、しかしゲームではラスボス王子の従者だった。婚約者ではない。まだワンチャン死亡回避の可能性はある。婚約者ならもしかしたら……いやいや、無理だな。だって冷酷無慈悲なラスボス王子なのだ、従者だろうが婚約者だろうが殺すときは殺すよ。やっぱりムリゲーだ。

「ちようどいいから、おまえが王子の誤解を解け」

私は父上に手を引つ張られ、部屋から連れ出されてしまった。おそらく応接室に向かっているのだろう。長い廊下を歩きながら、私は父上に「善処します」と答えた。

今の私は力のない子供だ。扶養年齢のうちは父上という権力には逆らえない。雨風をしのげて、温かい食事を食べ、知識を蓄えらるる環境を与えられている。この樂園は手放せないっ！

しかし十八で死ぬのも嫌なので、そこからの脱出を図りつつ、現状維持を目指すのだ。

そして私たちは、本棟の応接室の前に来た。

執事が、おそらくモーラから手渡された黒のジャケットを私に着せ掛け、服装や髪型をサツと整えた。一国の王子に会うのだから、身だしなみは大切だ。

そうしてから、執事は応接室の扉を開ける。まず目に入るのは、大きくて凝った装飾のなされた暖炉だ。室内の広い空間がしっかりと暖められている。

王族を通すのだから、ここは屋敷の中で一番上等なサロンなのだろう。一枚絵のように庭の雪景色が望める大きなガラス窓がある。雪が多いストラーレン王国では珍しく、今日は晴れているので、明るい日差しが室内に射しこんでいた。

その窓から外を眺めている、小さな後ろ姿。

鮮やかなゴールドの髪色を見て、ドキリと胸が高鳴る。恋などという甘いものではなく、刺された腹が洩るような、死に直結したドキリだ。

王子は金糸で縁取りと刺繍をした白地の膝丈ジャケットに、黒のロングブーツ姿。たつぷりした波打つ髪が肩を覆っている。

後ろで手を組んで庭を見ていたが、私たちが入ってきたことに気づいて、こちらをゆっくり振り向いた。アバーチェと同じ年なので、五歳。ゆえに、頬にはまだ幼い丸みがある。しかしばつちりした目元から厳しい視線が放たれて、口は引き結んでいる。

五歳ながらも堂々として厳かな、まごうことなきラスボス王子がそこにいた。

「セベステイエン公爵、とつぜんの来訪で申し訳ない。陛下から婚約の話がととのつたと聞き、はやくあいさつしたくなったのだ」

柔和な微笑みをたたえた王子は、頭を下げる父上に挨拶をした。

「それはありがたい御言葉。ノワールも喜んでおります。公爵家はいつでも殿下を歓迎いたしますよ。さあ、ソファのほうへどうぞ」

王子は上座にあるひとり掛けの椅子に座る。横にある複数人かけられるソファに、父上、私の順で腰かけた。

というわけで、婚約を回避するべく王子の説得、開始である。

振る舞われた紅茶をひと口飲み、王子は私に告げた。

「ノワール、とつぜんの話で驚いたであろうが、こころよく受け入れてくれて嬉しかったぞ」いきなり名前を呼ばれ、私は息を呑んだ。

夢の中では名前を呼ばれなかった。いや、私の名前など知らないような感じだった。従者の命など取るに足らないという様子で、息を吸うような手軽さで私を殺したではないか。

とは思ったが、まだ五歳の王子には知る由もないことだな。

しかしながら、婚約をこころよく受けた覚えはない。視線を下に落としたまま、私は口を開いた。「恐れながら、殿下。先日は無礼にもお手に勝手に触れましたこと、お詫び申し上げます」

婚約のことには触れず、まずは魔力暴走していた王子の手を握った件について謝罪した。緊急事態ではあったが、許可もなく王族の手に触れたのはいけないことなのだ。

「顔を上げてくれ、ノワール。惨事を引き起こすかもしれないことを助けてもらったのだ。我は感謝している」

許しを得たので顔を上げると、王子は機嫌良さそうに微笑んでいた。

ゲームの中ほどトゲトゲした印象ではないが、ミニラスボスチックで、まだちょっと怖い。でも五歳児の割には受け答えがしっかりしているから、話は通じそうだな。

「私はとある事情で素性を隠しております。それで、殿下にお会いしたときはドレスを着用していたのですが……」

「ああ、そうであったな。そなたは虹色の輝きをまとう、とてもきれいな令嬢であった。そういえば今日は、ズボンを着用しているようだな？」

先ほどもでパン作りをしていたから普段着だ。でも腐っても公爵の子なので、普段着もそれなりに上等なものを身につけている。絹の白シャツに黒い長ズボン、ブーツを履いていて、そこに先ほどの黒のジャケットを着せられた。ゆえに、今日は良いところの坊ちゃん風の出で立ちだ。

「はい、私は男ですので。なので、婚約の話は……」

すかさず婚約解消の流れに持って行こうとしたが、王子は話を途中で遮った。

「もちろん、そなたが男児なのは承知しているぞ。婚約の話を下にしたときにも、そのことを言われた。それでも婚約者として、そなたに一番身近にいてほしいと思ったのだ」

なに？ 性別誤認はしていない？ てつきり、女だと思って婚約を申しこんだと思っていたのに。婚約解消は簡単だと思っていたが、出鼻をくじかれてしまった。父上が横であからさまに安堵の息をついているのが不快である。

先手をいなされ、私は焦りを感じた。だが、まだこれからだ。なんとしても、ラスボス王子との関係をここで断ちたい。

「先日は殿下の魔力を制するため、なにやら派手なことになってしまいました。殿下が先ほど言った虹色の輝きは殿下の魔法が分解されたものであり、私の力ではありません。私には魔力がないのです。王子のそばににいるには分不相応かと。なので、婚約の話は……」

「それがもう、すごいことではないか。我の魔力に屈しないのは、そなただけだ」

王子は笑顔で言う。しかし貼り付けたようなその笑みでは、心が読めない。

それに全然すぐくないのに、王子に伝わっていないで困惑する。どう説得するべきか悩むが、と



にかく押すのみだ。

「王子の魔力に屈しないなど、とんでもないことです。屈しないのではなく、ただ魔法が効かないだけなのですから。私が強いわけではない、むしろ弱い者なのです」

実際、剣といった魔法以外のもので攻撃されたら、たちまち死ぬ。ゆえに、まったく強くはない。だからそう言ったのだけど、私の言葉を聞くなり、笑顔だった王子は急に口をへの字に引き結んだ。

「そなたは、我と婚約したくないのか？　やはり、我が呪われた第二王子だと知っているのだな？」  
うりゆゆゆううつと、まなこを涙でにじませる王子。

そんなっ！　あの冷酷無慈悲なラスボス王子の初手が、まさかの泣き落としだなんて！

いや、しかし、さすがのラスボス王子も五歳児ゆえに致し方なしか。

とりあえず、呪いうんぬんの誤解を解かなくてはならない。

「殿下。私は殿下が呪いの王子というのは初耳で、それゆえに婚約したくないわけではないのです」

「ではっ、我と婚約してくれるな？」

「それは……」

「婚約してくれないのであれば、ノワールは我が呪いの王子だから婚約したくないのだ、と思うことにするが？」

王子は涙目のままムウと再び唇を引き結んだ。

そんなあ、私は心無い噂で人を選ぶようなことはいたしません。あなたがラスボス王子で、将来

私を殺すから婚約したくないのだ。これは事実だから仕方がないでしょ。

とはいえ、父上の前でラスボス云々を口にするわけにもいかないし、父上が厳しい目でこちらを見て、婚約を承諾しろと無言の圧力をかけてくるし。うう。

正論で押し切るのは自信があつたのだが、泣く子にはかなわない……か。

「殿下。婚約を承諾いたしますが、くれぐれも素性は内密にお願いします」

—— 第一回、王子説得バトル敗退。

押し切ることができず、私は婚約を受け入れたのだった。

だがとりあえず、ノワールが第二王子と婚約したと公に伝わらなければ、今後婚約解消にこぎつけても人に知られることなく、こっそり舞台から退場できるだろう。そう思って、そこだけはしっかり念を押しておいた。

「ふうむ、よくわからぬが、父……いや、陛下からもそう言われているので、それについては守るぞ。美しい婚約者ができたとウエル兄上に自慢できないのは残念だがな」

王子は涙ぐませた目を瞬きひとつでリセットし、ひと息ついた様子で紅茶を優雅に飲んだ。

あ、もしかして演技だったのか！　私から言質を取るために？

婚約を受諾したとしても、呪いの第二王子だと知ったら婚約を取り消されるのではないかと王子は危惧して、いち早く屋敷に出向いたのかもしれない。

だったら、婚約を渋ったことで傷ついたかもしれないね。呪いというのは初耳だが、たぶん王子の魔力が多すぎることに関係しているのだろうな。

私は彼が悪逆の限りを尽くす美貌のラスボス王子になることを知っている。膨大な魔力量で、正攻法では誰もかなわない強キャラだ。バッドエンドでは王都を火の海に沈めてしまう。それほどの魔力を有しているのだ。

なので、呪いがどうかは、今更まったく気にならない。

それよりも、あの自信と威厳に満ちあふれたラスボス王子になる男が、幼少期には泣き落としするような子供だったなんて、考えもしなかった。そこまでして私との婚約を望む、その理由はよくわからないが。

今回の敗因は、今の王子とラスボス王子のギャップに虚をつかれたから、だな。だが次こそは、王子を説得して婚約解消を成立させてみせる。

命がかかっているので、こちらも必死なのだ。

表面上はにこやかに、内面でそんなことを考えていると、王子が王宮に帰る時間になった。

お見送りするため、私は父上とともにエントランスへ出る。王族への礼儀として、当然外で見送るつもりだった。

「外は雪が強くなってきている。寒いから見送りはここまででよい」

しかし王子はエントランスでそう言い、私の右手を両方の手で包んだ。

「この次は王宮に招待するぞ。来月、そなたと会える日を心待ちにしている」

王子は五歳児だから決まり文句を言ってるだけなのかもしれないけど、こんな丁寧な挨拶を王子様にされたら、令嬢は嬉しいだろうと思う。スマートかつ紳士的だ。

でも私はまだ怖い気持ちがあるから、返す笑みが引きつってしまうけど。

それよりも、手から王子の魔力が漏れている。この前の出来事から数日しか経っていないのに、もう魔力満タンなのか、と感嘆した。結構吸ったつもりだったけど、この辺りはさすがラスボス王子というところだな。

なにも言われていないが、アベーチェだったら頭痛がするって大騒ぎするくらいの魔力漏れだから、この前のように気絶しない程度にチュツと魔力を吸ってやった。

するとそれに気づいたようで、王子はニコリと笑う。

「ありがとう。楽になった」

ゲームの王子は、いつも厳しい表情をしているか、笑っても嘲笑<sup>ちやうしょう</sup>だった。だから、陰の取れた王子の顔というものを珍しい気持ちで見る。

まあ、この世界はリアルだし、生活をしていれば普通に笑いもするし、幼い子供なのだから無邪気な面もまだあるのだろう。

ならば。もしも、彼がなにもかもが不快だと言わんばかりのラスボス王子にまだなっていないのだとしたら、私が殺される未来も修正可能かもしれないな。いや、そうであれ。

とにかく婚約者になってしまったのだから、関係を築きながら死亡ルートを回避するしかない。王子は私に、そして父上にも会釈して、執事が開けた玄関を出ていった。馬車寄せにきらびやかな馬車が止まっていたから、すぐにそれに乗りこめただろう。

玄関扉が閉まり、王子の姿が見えなくなつてようやく、私はホッと安堵の息をついた。

「父上、これからはどうなるのですか？ 殿下は来月王宮にと言っていましたか」

婚約したらどうなるのかわからず、父上に尋ねる。というか、男同士で婚約という事態がまったくピンと来ていないのだ。

「婚約したら、月に一度顔を合わせて打ち解けるよう努めるものだ。互いの家族や兄弟とも仲を深め、家族ぐるみで親しむようにする」

「素性を隠す私はどのように振る舞えばよいのですか？」

「しばらくは公爵家の遠縁の令嬢として王宮に通い、王子と仲良くなれば良い。のちのことはいずれ考える」

行き当たりばったりな父上を、私はついジト目で見てしまう。そして、やはり私は女装を継続しなければならぬようで、内心ため息をついた。

「王子とノワールが婚約だなんて、許せせんわ。公爵家と婚約をするというのならアバーチェでもないのではなくてっ？」

とその時、上階につづく階段に紫色のドレスを身にまとう母上が現れ、私たちを見下ろして言った。外出しない壮年の女性はロングドレスを好むようで、母上も足元まで隠れるスカート姿だ。

父上は見事な青髪。そして父上とは従兄妹<sup>いとこ</sup>同士の母上も素敵な青髪だ。

青髪同士でなぜ黒髪が生まれてしまうのやら。文句は『花抱き』の公式に言ってもらいたい。

「公爵家との縁組を希望しているのなら、もちろんアバーチェを推すが。王子の望みはノワールの能力なのだ。アバーチェは代わりにならぬ」

とりなすように父上は言うが、母上は強気でエントランスに声を響かせる。

「能力目当てなら、そんな子は王宮に売り渡してしまえばいいわ。使用人として手元に置けばいいのよ。その魔力なしの出来損ないを、公爵家の人間として王家に嫁がせるなど認めません。公爵家の恥になるわ」

「曲がりなりにも私の息子だ、そのような不憚<sup>ふびん</sup>な真似はできぬ」

曲がりなりって言葉は聞き捨てならないが、まあ一応、父上は反論してくれた。だが母上は、私をキッと睨んだ。

「ノワール、王子に見初<sup>みそ</sup>められたからといって、いい気にならないでちょうだい。王子の婚約者でも、奥から出てくることは許しませんからね！」

鼻息荒くそう言い、母上は階段を登って二階に行ってしまった。

まあ、産んだ私の存在をなかったことにする母上だ、私は嫌われているのだろうね。私が黒髪なのはゲーム設定のせいだろうけど、母上がそんなことを知る由もないし。母上にとって私は、ただただ不気味で目障りな者なのだろう。

今まで私は、十八歳になるまでは公爵家の奥でぬくぬく暮らしていたらいいなと思っていた。

しかし母上の剣幕を見ると、それは難しそうだな。

魔法で水をぶっかけられそうになったことがあるが……もしかしたら魔法で私を殺そうとしたこともあったのかもしれない。首を絞められたらアウトだったけど、自分で直<sup>じか</sup>に手を下すほどの勇氣はなかったのだろう。

だとすると、案外、ここで王子の婚約者になれたことは良かったのかもしれないな。さすがに母上も、王子の婚約者を書そうとはしないだろうから。

うとましく思っていたとしても、我が子に殺意を向けるような母親であってほしくないのだけど、あそこまでの嫌悪を向けられたら最悪の展開も可能性のひとつとして考えておくべきだな。

前世でいつの間にか死んでしまった私の今世での目標は、寿命を全うすることだ。

目の前にラスボス王子という死の脅威が迫っているが、その前に母上に殺されたら目も当てられない。注意するに越したことはないな。

しかし、ラスボス王子の従者になる未来は想定していたけれど、まさか婚約者になるなんて考えてもみなかった。

ゲームで婚約の話があったかどうかは知らない。でもゲームのノワールは、こういうきつかけでラスボス王子の従者になったのかも知らないな。推測だし、モブにそもそも設定などなかったかもしれないけど、辻褄は合っている。

でも、だとしたらゲームのノワールは王子の魔力を吸ってあげなかったのだろうか。王子が苦しんでいても、助けの手を伸ばさず放っておいたのかな？

そうでなければ、先ほど会ったあの王子が、生きることがつらく苦しいと恨みを募らせるラスボス王子にはならないような気がする。

殺される運命である私は、王子に思うところはある。けれど、魔力暴走のようなつらい目にあってほしいなんて思わないし、治してあげられるものは治してあげたいと思う。

苦しいのはつらいから、手を差し伸べただけだ。

あ、死亡回避するのに、王子をラスボス王子にさせないって手もあるな。彼がラスボス王子にならなかつたら、私は殺されないかもしれない……のではないか？

だけど、そんなことできるのか？ 今までは、死亡を回避するためにラスボス王子と出会わないことを目標にしていたけど、出会ってしまった。あまつさえ従者を通り越し婚約者になってしまったから、目標を設定し直さなければならないな。

私が死なずに天寿を全うするためには、ラスボス王子との関係性をなくすことが肝心だ。

まず目標その一、婚約解消するよう王子に働きかける。彼から離れられたら屋敷の奥にこもって、もう外へは出ない。

そうなれたら最高だが、やはり計画というのはそううまくはいかないもの。

そのための代替として、目標その二。婚約解消ができないうちは、王子のラスボス化を回避する。王子がラスボスにならないようにするにはどうすればいいか、うーん、それはわからないが。とにかく魔力暴走するような事態を防げばいいだろう。人々から敬遠されなければ、孤独な王子にならないと思う。

よし、その方向で行こう。しかし、とにかくにも、母上怖すぎ。

★★★★★